琉球大学学術リポジトリ

言語から考える九州から琉球へのヒトの移動：語彙と文法から移動の時期を考える

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学島嶼地域科学研究所
	公開日: 2020-09-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 狩俣, 繁久, Karimata, Shigehisa
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46725

『国際琉球沖縄論集』第 8 号
2019 年 4 月

【研究論文】

言語から考える九州から琉球へのヒトの移動
――語彙と文法から移動の時期を考える――

狩俣　繁久※

Investigating Migrations from Kyushu into the Ryukyus through Language

KARIMATA Shigehisa

要旨

北琉球語と南琉球語は文法、語彙の面で大きな違いが見られる。南琉球語と北琉球語と九州方言を比較し、(1) 南琉球語には南九州琉球祖語に遡る要素が存在すること、(2) 南琉球語に存在し北琉球語に見られない要素がかつては北琉球語にも存在したこと、(3) 北琉球語と九州方言に共通するが, 南琉球語に見られない要素があることを確認した。そのことから、南北琉球語の言語差は九州から琉球列島への人の移動の大きな波が 2 回あったことに由来することを主張する。考古学等の研究成果を参考にすれば、南琉球に南九州琉球祖語を保持した人々の移動の時期は、10 世紀から 12 世紀である。2 回目の人の移動によって北琉球で貝塚時代が終わり、グスク時代が始まった。南琉球にもグスク文化は伝わったが、その言語体系を大きく変化させるほどのものではなかった。

Abstract

The Ryukyuan archipelago is divided into two areas, Amami and Okinawa islands, and Miyako and Yaeyama islands, separated by a 250 km wide gap, the Kerama gap. Until the end of the shell period, these two areas had distinct cultures characterized by very different archeological records. It is only with the advent of the Gusuku period that Miyako and Yaeyama islands were integrated into the same cultural area as Amami and Okinawa islands. Likewise, Ryukyuan languages are broadly classified into Northern Ryukyuan, spoken in Amami and Okinawa islands, and Southern Ryukyuan, spoken in Miyako and Yaeyama islands. One of the research goals of Ryukyuan linguistics is to identify the factors accounting for the linguistic differences between Northern and Southern Ryukyuan, and understand whether these differences can be related to archeologic findings.

※琉球大学島嶼地域科学研究所教授
Professor, Research Institute for Islands and Sustainability at the University of the Ryukyus

はじめに

琉球列島は、奄美諸島、沖縄諸島と宮古諸島、八重山諸島の二つの地域の間にある約 250 キロの海域・ケラマギャップによって大きく二つに分かれる。二つの地域は、貝塚時代後期まで考古学的にも大きく異なる文化圏を形成し、宮古諸島、八重山諸島が奄美諸島、沖縄諸島と同じ文化圏に組み込まれるのはグスク時代以降である。琉球語も、奄美諸島、沖縄諸島で話される北琉球語と、宮古諸島、八重山諸島で話されている南琉球語に大きく区分される。琉球語の南北差が生まれた要因は何か、考古学などが示す事象と関連があるのか、その解明は琉球語研究の課題である。

1. 文法的な特徴から見た琉球語の南北差

Karimata（2018）は、語彙に比べて保守的な性格を有する文法現象に着目し、北琉球語と南琉球語の間にある言語差を検討した。比較の対象にした主要な文法現象は、(1) 過去形などの活用形に現れる音便現象、(2) アスペクト体系とそれを構成する形式、(3) 無情物の不存在を表す単語の形式と文法的なふるまい、(4) 並列複文の従属文の述語になる中止形の形式等である。

(1-1) 九州方言と北琉球語の動詞の過去形等の活用形には、撥音便、促音便、ウ音便、イ音便の音便現象が起きているが、南琉球語には音便が起きていない。

(1-2) 日本語、琉球語のなかで音便化現象がみられないのは南琉球語だけであり、日本語、琉球語の中で最も古い特徴を保持する。

(1-3) 北琉球語の音便は九州方言と同じ形式が変化したものである。

表 1. 南・北琉球語の音便の有無

九州方言	北琉球語			南琉球語	
	おもろさうし[1]	奄美方言	沖縄方言	宮古方言	八重山方言
有	有	有	有	無	無

(2-1) 北琉球語のアスペクト体系は、形式的には九州方言と同じ三項対立型（スル、ショル・シトル）で、南琉球語は二項対立型（スル・シテイル）である。

(2-2) 北琉球語のシトル対応形式は、九州方言とは異なり意味的には東日本方言、南琉球語と同じ動作継続、変化結果継続を表す。

(2-3) 北琉球語のショル対応形式は、東日本方言のスルと同じく完成相の意味を表す。

表 2. アスペクト体系

九州方言		那覇方言		宮古方言	石垣方言	東日本方言	
飲む 起きる	完成相	飲ムン 起キーン	完成相	飲む 起キ	飲ムン 起キン	飲む 起きる	完成相
飲みよる 起きよる	進行相						
飲んどる 起きとる	結果相	飲ドーン 起キトーン	継続相	飲ミウー 起キウー	飲ミン 起ケーン	飲んでいる 起きている	継続相

(3-1) 無情物の不存在を表す単語は、琉球語では不規則変化の動詞だが、九州方言（および日本語諸方言）では形容詞である。
(3-2) 琉球語の無情物の不存在を表す動詞は、文法化（補助動詞化）して終結相のアスペクト形式の語彙的資源となる。
(3-3) 琉球語の不存在動詞は、形式的な特徴だけでなく文法的ふるまいも動詞である。
(3-4) 琉球語の不存在動詞は、日本語から琉球語を区別する重要な特徴である。ただし、奈良時代の東国方言では「無ふ」という不存在を表す助動詞が確認できる[2)]。

「A が～シテ、B が～する」のような並列複文や「A が～シテ～する」のようなふたまた述語の従属文の述語になる琉球語の中止形は、二つの形式がある。

(4-1) 北琉球語のうち、奄美諸島と沖縄北部地域の方言の中止形は、九州方言と同じ音便化したシテ中止形が見られる。
(4-2) 南琉球語と伊平屋島、伊是名島の方言にはシアリ中止形があり、シテ中止形は見られない。
(4-3) 沖縄中南部地域の方言と 1500 年代に編纂された『おもろさうし』にはシアリ中止形と音便化したシテ中止形が見られる。

その他に、移動動作の目的を表す形式、上二段動詞の下一段化等、琉球語全体に見られ、九州方言の一部に見られるものがある。

(5) 「行く」「来る」等の移動動作の目的を表す日本語の副動詞の語尾の「～に」に対応する九州方言の「～ガ」「～ゲ」、琉球語の沖縄方言と宮古方言の「～ガ」、八重山方言の「ナ[3)]」も九州琉球祖語にさかのぼる文法形式である。

サキ　ヌミーガ　イチュン。
（酒を飲みに行く。）　沖縄方言
サキュー　ヌむガドゥ　イキ゛ス。
（酒を飲みに行く。）　宮古島市下里方言
グシ　ヌミナ　パルン。
（酒を飲みに行く。）　石垣市新川方言

(6-1) 古代日本語の上二段動詞「起く（起きる）」、「落つ（落ちる）」は、琉球語全体で下一段動詞化している。
(6-2) 宮崎、大分の九州北東部方言では否定形「起ケン（起きない）」「落テン（落ちない）」「下レン（下りない）」や過去形「起ケタ（起きた）」「落テタ（落ちた）」と連用形「落テ（落ち）」「下レ（下り）」のように上二段動詞の活用形の下一段動詞化が見られる。

表 3. 南・北琉球語と九州方言

	九州方言	北琉球語	南琉球語
音便	有	有	無
アスペクト意味	西日本型	東日本型	東日本型
アスペクト形式	3 項対立型	3 項対立型	2 項対立型
不存在の単語	形容詞	動詞	動詞
中止形	シテ	シテ（奄美・沖縄北部） シテ・シアリ（沖縄中南部） シテ・シアリ（おもろ） シアリ（伊平屋・伊是名）	シアリ
移動動作の目的[4)]	一部九州でギャ・ゲ	ガ	ガ
下二段	一部九州で下一段化	下一段化	下一段化

五十嵐陽介（2017）が主張する九州琉球祖語を認め、それを保持する人々が南下して琉球列島に拡散したとするなら、次のことが想定できる。

（A）南・北琉球語に共通の特徴は、（A-1）九州琉球祖語（または日琉祖語）から受け継いだものと、（A-2）琉球語で発生した改新とがある。
（B）南・北琉球語で異なるもので、南琉球語に見られる特徴は、（B-1）九州琉球祖語（または日琉祖語）から受け継いだものと、（B-2）南琉球語で発生した改新とがある。
（C）北琉球語と九州方言に共通に見られる特徴は、九州琉球祖語から分岐した後の 2 度目の大きな移動によって九州方言からもたらされたものである。

（A-1）には下一段化、移動動作の目的形がある。焦点化助詞=係助詞の du（ぞ）は日琉祖語から受け継いだもので、九州方言を含む本土諸方言で失われたものである。（A-2）には不存在動詞、アスペクト的意味がある。（B-1）には、非音便、2 項対立アスペクトがある。シアリ中止形もここに含まれる。（C）には音便と 3 項対立のアスペクト形式とシテ中止形がある。

以上のことから狩俣繁久（2019）で次の仮説を提示した。

1）（A-1）（B-1）の特徴を有する九州琉球祖語を保持した人々が南九州から南下して北琉球に拡散。
2）その人々の一部が 10 世紀から 12 世紀の間に南琉球に渡海・拡散。
3）（C）の特徴を保持する南九州方言を保持する人々が北琉球に渡来・拡散。

うえの 1)～3)は、九州からの 2 度のヒトの移動があったことを意味する。狩俣繁久（2019）では次のような分岐を描いた[5)]。

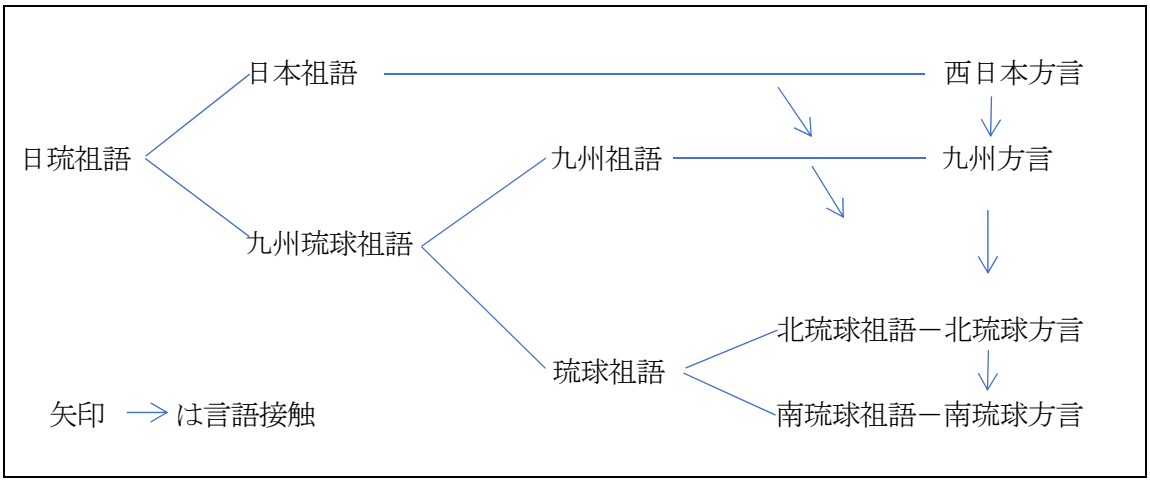

図 1.　日琉祖語の分岐図

2. 語彙から見た琉球語の南北差

本節では語彙の面から南・北琉球語の言語差と九州方言の影響の有無を考えてみる。言語には音声・音韻、文法、語彙という言語特性の異なる側面があり、それぞれの変化のメカニズムが大きく異なる。閉じた体系をなし保守的な傾向を示す文法に比べると、語彙は、全体として開かれた体系をなし、言語接触によって借用語が持ち込まれたり、若い世代で発生した新語が短期間に広がったりして、新語が既存の単語と置き換わることもある。いっぽうで、基礎語彙のように長く保持される単語もある。

文法事項とおなじように、(A) 南・北琉球語に共通で九州琉球祖語から受け継いだ語彙、(B) 南・北琉球語に違いがみられ、南琉球語が九州方言と共通の語彙で南琉球語が古形と考えられる語彙、(C) 九州琉球祖語から分岐した後に二度目の移動によって九州方言から持ち込まれた語彙がある。

2-1. 南・北琉球語に共通し、九州琉球祖語から受け継いだ単語

南・北琉球語に共通し、九州琉球祖語から受け継がれた語彙として上村孝二（1964） があげた「ヒシ（海中の暗礁）」がある。「ヒシ」は、713 年の古文献「大隅風土記逸文」に記された単語である。

> 大隅肝属郡内之浦町の漁民は、「暗礁」をヒシと呼び、「陸続きの暗礁」をもそう呼んでいる。また同じものをトカラ列島でフセと言う。このヒシは「大隅風土記」に、隼人の俗語では海中之洲を必至（ヒシ）というと見えるその「必至」なのであって、フセはそれと兄弟分の語であろう。ヒシという語は沖縄方言にも分布している。

上村孝二（1961）は、カノク（砂浜・宝島）、ハビー（蝶）、ニュージ[6]（虹）なども上げている。カノク、ハビーもヒシと同じく、九州琉球祖語から受け継がれた語彙であろう[7]。上村孝二（1961）に挙がっていない単語でトカラ列島宝島方言のイヤコ（櫂・宝島）、テンド（太陽・宝島）がある。

表 4[8]．琉球語に見られる上村孝二（1961）の語彙

	暗礁	砂地	蝶	虹
上村（1961）	ヒシ	カノク	ハビー	ニュージ
奄美方言	hiʃi	kanïku	habïra	no:giri
沖縄方言	hiʃi	kaniku	ha:be:ru	nu:dʑi
宮古方言	piʃi	kaniku	pabiɳ	timpav
八重山方言	piʃi	kaniku	pabiru	mo:gɳ

南・北琉球語に共通する単語として兄弟の側から姉妹を指す名称で年齢の上下の区別をしない「をなり*wonari」と、姉妹の側から兄弟を指す名称で年齢の上下の区別をしない「ゑけり*wekeri」がある。表 5 の語形を見るとそれぞれの方言で音韻変化した結果、語形は大きく異なるが、琉球語全域に同系の単語が見られる。これらの同系語を九州方言で確認できていない。

琉球語全体にあまねく存在する単語は、南九州の一部の地域にわずかに残された「櫂」「太陽」のような単語と同じく、九州琉球祖語に遡り、かつては南九州方言に存在したが、九州方言で消えた可能性がある。あるいは、南九州から地理的に隔離したのち、琉球語でおきた改新の可能性もある。琉球語での改新だとしても、南九州を離れて南下した最初の集団が保持した単語で、それが与那国島まで広がった単語だと考える。

表 5．琉球語固有の単語

	櫂[9]	太陽[10]	姉妹	兄弟
トカラ宝島	ijako	teNdo	——	——
奄美方言	joho	tïda	’unari	je:ri[11]
沖縄方言	ʔwe:ku	ti:da	’unai	wiki:
宮古方言	zzaku	tida	bunaɳ	bikiɳ
八重山方言	jaku	tida	bunarɳ	bigirɳ
与那国方言	dagu	tidaN	bunai	bigi:

2-2. 南琉球語に九州琉球祖語から受け継がれた単語

南・北琉球語で異なり、かつ南琉球語の単語が九州琉球祖語から引き継がれた単語であることを示す単語は多くないが、重要なカギとなる単語として*mai（米、稲、飯）系の単語を挙げることができる。

宮良當壮（1937）は、八重山諸島の石垣島大浜、竹富島、小浜島、鳩間島、黒島、与那国島の各方言の mai、新城島方言の maï を稲と米を区別せずに指す単語として挙げている。琉球大学沖縄文化研究所編（1968）は、宮古島下地与那覇、来間島、伊良部島佐和田、大神島、多良間島塩川の各方言の maz を稲と米を指す語として挙げている。

いっぽう、北琉球語には、*ini 系の単語と*kome 系の単語があり、稲と米は区別して表される。奄美大島大和村大和浜方言には、ʔni:（稲）と kumï（米）がある。奄美大島宇検村生勝方言では ini:（稲）と kumï（米）で、喜界島志戸桶方言でも ini:（稲）と humï（米）である。徳之島の天城町与名間、徳之島町母間、伊仙町犬田布の各方言で、ini:（稲）と kumï（米）

で、沖永良部島の和泊町国頭と知名町知名の方言で ini:（稲）と humi:（米）である。

沖縄方言の中央方言の那覇市首里方言では kumi（米）と Nni（稲）を区別し、Nnikai（稲刈り）、NnimadʒiN（稲叢）などのように複合語にも Nni が使用されている。沖縄中南部地域の方言でも ini（稲）と kumi（米）である。この状況は、奄美大島から沖永良部島までの状況と同じである。

北琉球語の中の沖縄本島北部の国頭村、大宜味村、東村、今帰仁村、本部町の方言でも稲と米を区別し、米は*kome 系の単語を使用するが、稲を表す単語としては、*mai 系の単語を使用している[12)]。今帰仁村与那嶺方言では、me:hai（稲刈り）、me:gadʒimi（稲叢）等の複合語の構成要素としても me:（稲）が使用されている。沖縄本島の北に位置する与論島の城方言では稲と米を区別しない mai を使用している。北琉球語の沖縄本島北部方言と与論方言と、南琉球語の*mai 系の単語は、九州琉球祖語を引き継いだ単語であろう。

表 6. 米、稲、関連する単語

	米	稲	米の飯	鎌
大和村大和浜	kumï	ʔni:	obaN	kama
徳之島町母間	kumï	ini:		kama
喜界島志戸桶	humï	ini:		hama
和泊町国頭	humi:	ini:		hama:
与論町城	mai	mai	mai	hama
沖縄今帰仁与那嶺	humi:	me:	me:	hama: / ira:na
沖縄那覇首里	kumi	Nni	me: / ubuN	irana
宮古島市平良下里	maz	maz	maz	zzara
八重山石垣市石垣	maɳ	maɳ	maɳ/ NboN	gagɳ
与那国島祖納	mai	mai	mai	irara

2-3. 二度目の移動で北琉球語にもたらされた語彙

奄美大島から沖永良部島、そして沖縄中南部地域で使用されている*ine・*kome 系の単語、そして沖縄本島北部地域で使用されている*ine 系の単語は、その分布状況から九州から持ち込まれた単語だと考える。

奄美大島から沖縄本島北部地域の方言では、「鎌」を表す単語として*kama（鎌）系の単語が使用されているが、南の沖縄本島中南部地域、そして宮古島では*irara（鎌）系の単語が使用されている。*kama（鎌）は、九州琉球祖語からの分岐後に九州方言からもたらされた語彙で、*irara（鎌）系の単語は、最初に移動してきた人々が有していた単語で、九州琉球祖語（五十嵐 2017 のいう南部九州・琉球語群）から引き継いだ単語であろう。なお、*mai は漢語「米」の呉音の発音であり、漢音の bei、和語の*ine・*kome 系の単語のまえに持ち込まれたものだろう。

なお*mai（米・稲）と*irara（鎌）が南琉球語での改新でなく、九州琉球祖語（南部九州・琉球語群）から引き継がれた古形であるとするなら、本土方言にも見られる*ine・*kome 系の単語や*kama（鎌）系の単語は、後に持ち込まれた単語（改新）であろう。

九州からの人の移動が二度あったという仮説を適用するなら、*mai 系の単語を保持した人々が最初の移動で渡来したのち、*ine・*kome 系の単語を保持した人々が北琉球に渡来

し持ち込んだと考えることができる。沖縄本島北部地域の*mai 系の単語は、それが北琉球語にも存在したことを示唆するものである。

次のようなシナリオが描ける。

第 1 幕

（A） 音便の起きる前の活用形とシアリ中止形を保持し二項対立型のアスペクトの言語（九州琉球祖語）を使用する人々が南九州を離れ、奄美諸島、沖縄諸島に拡散した。

（B） その言語には、*pise（暗礁・干瀬）や*kanoku・kaneku（砂地）の単語があった。

（C） その人々は「稲」と「米」を区別せず、*mai（稲）を栽培して*irara（鎌）を使って*mai（米）を収穫する人たちだった。

（D） 最初の南下から時を経て慶良間ギャップを越えて宮古諸島、八重山諸島に渡った。

第 2 幕

（E） 最初の渡来から大きく遅れて、音便化した活用形とシテ中止形を持つ、三項対立型のアスペクト体系の言語を保持する人々が九州から再び渡来してきた。

（F） *ine（稲）を栽培して*kama（鎌）で*kome（米）を収穫する人たちの言語は、奄美大島から沖永良部島までの言語に大きな影響を与えた。

（G） 沖縄北部地域では、収穫物であり貢納物でもある米には*kome 系の単語使用に替えたが、栽培植物としての稲には*mai 系の単語を使用し続けた。

（H） 沖縄中南部地域では*ine（稲）を栽培して*kome（米）を収穫したが、*irara （鎌）を使用した。この地域にはシアリ中止形とシテ中止形が併存し、二項対立型と三項対立型のアスペクトが混交した言語となった。

宮古・八重山諸島への移動の時期は、考古学の研究成果によれば 10 世紀から 12 世紀ごろであろう。2 回目の人の移動によって北琉球（奄美・沖縄）で貝塚時代が終わりグスク時代が始まった[13)]。南琉球にもグスク文化は伝わったが、その言語体系を大きく変化させるほどのものではなかった。

保守的な傾向を有する文法に大きな影響を与えていることに鑑みると、二度目の北琉球への移動は、規模の大きいものではあったが、北琉球語にも南琉球語との共通性が残っていることから、言語の入れ替わりを伴うほどのものではなかった。また、琉球語が九州琉球祖語から分岐したとするなら、琉球語全体に見られるにもかかわらず、九州方言で見られない特徴は、九州琉球祖語から琉球語が分岐したのち、九州方言で失われた可能性がある。さらに語彙や文法事項を増やし、総合的に検討していくことが課題である。

※本稿には Karimata（2018）、狩俣繁久（2019）の内容の一部が含まれる。

付記：本稿は JSPS 科研費 17H06115（基盤研究（S）「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」、琉球大学学長リーダーシッププロジェクト研究「琉球諸語における「動的」言語系統樹システムの構築をめざして」、新学術領域研究「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」、文部科学省特別経費プロジェクト「自律型島嶼社会の創生に向けた「島嶼地域科学」の体系化－島嶼地域研究・教育の拠点形成－」の研究成果の一部である。

注

1）かりまたしげひさ（2016）で沖縄方言と『おもろさうし』の過去形やシテ中止形の音便について論じた

2)「立ち別れ去にし宵より夫ろに逢はなふよ（立ち別れ去ったあの夜からずっと逢っていない）」（万葉集 3375）。動詞型だとはいっても琉球語は本動詞で古代東国方言は語尾・接辞で違いがあり、別々に発生した収斂の可能性がある。

3）石垣方言の-na は、-ga の g が鼻音化してできた形式である。-ga＞-ŋa＞-na

4）五十嵐陽介（2017）の「九州・琉球語派を定義づける同源語」に含まれる。

5）五十嵐陽介（2017）は、「九州・琉球語派」の同源語を見出すための語彙を抜き出して検討し、「琉球語と姉妹関係にあるのは、南部九州語（鹿児島県を中心とした言語）である」として「南部九州・琉球語群」を想定している。ここでは五十嵐陽介（2017）をふまえて論を進める。狩俣繁久（2017）の九州方言の一部は、五十嵐陽介（2017）の「南部九州語」を指すが、ここでは「九州方言」を使用する。

6）奄美方言の no:giri（虹）は nokogiri（鋸）に対応し、宮古方言の timpav（虹）は「天蛇」に対応する語形である。九州琉球祖語に遡らない可能性がある。

7）トカラ列島の方言が九州方言に連なるものなのか奄美方言からの借用語なのか慎重な検討が必要である。

8）表の奄美方言は『奄美方言分類辞典』の大和村大和浜方言、沖縄方言は『沖縄語辞典』の首里方言、今帰仁方言は『沖縄今帰仁方言辞典』の今帰仁村与那嶺方言、八重山方言は『八重山語彙』の石垣市大浜方言である。「表 5」以下も同じ。

9）奄美方言では tako＞toho（蛸）のように広母音 a と半広母音 o に挟まれた k が h になり、h の前後で遠隔相互同化がおきている。奄美方言の joho は、*iwako＞ijaho＞joho の変化を経た語形である。沖縄方言では*mimiwa＞mime:（耳は）のように語中の w が唇音退化によって音消失し母音連続 ia が隣接相互同化によって e:に変化している。沖縄方言のʔwe:ku は、*iwako＞ijako＞ʔwe:ku の変化を経た語形である。宮古方言では*iwo＞zzu（魚）のように語頭の i が摩擦音化して z に変化し、その z の摩擦音性が隣接進行同化によって w を z に変化させている。宮古方言の zzaku は*iwako＞*zwako＞zzaku の変化を経た語形である。八重山方言の jaku は、語頭の i の進行同化によって w が口蓋音化して j に変化した語形であり、*iwako＞ijako＞jaku の変化を経た語形である。与那国方言では jama＞dama（山）、ja＞da（矢）のように j が d に変化する。また tako＞tagu（蛸）のように語中の k が g に変化する。与那国方言の dagu（櫂）は*iwako＞ijako＞jaku＞dagu の変化過程を経た語形である。

10）トカラ列島宝島の tendo （太陽）、琉球語の tïda 、ti:da、tida（太陽）は、天体の運行、天体の運行する道、等の意味を表す漢語の天道（tendau）が語源で、dou（道）は呉音である。呉音は「日本漢字音のうち、漢音より古く成立した字音の総称。平安時代に新たな字音が漢音として招来された際には、すでに日本語化した音と意識されて、漢音を「声音」とよぶのに対して、「和（倭）音」とよばれた」（『言語学大辞典第 6 巻述語編』）。呉音には「馬（マ）」「梅（マイ）」等がある。太陽を表す単語として「日（ひ）」に置き換わって琉球語に持ち込まれたものと考える。

11）奄美大島北部方言では半狭母音 e、o に挟まれた語中の k が摩擦音化したのちに音消失する。この単語では語頭の w も音消失している。*wekeri＞eheri＞je:ri

12）名護市史編さん委員会編（2006）、pp.332-333、pp.492-493 を参照。
13）ここでは安里進・土肥直美（1999）を参考にした。

文献

安里　進・土肥直美（1999）『沖縄人はどこから来たか―琉球・沖縄人の起源と成立―』ボーダーインク、沖縄。

五十嵐陽介（2016）「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか？―「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱―」国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか―日本言語学史の光と影」第 3 回共同研究会，2016 年 8 月 31 日，国際日本文化研究センター、京都。

五十嵐陽介（2017）「九州・琉球同源語調査票」一橋大学大学院五十嵐陽介ゼミ「終日ゼミ」発表原稿、2017 年 9 月 12 日、東京。

上村孝二（1961）「九州・琉球語の語彙ー南九州」『方言学講座第 4 巻』東京堂出版。

上村孝二（1964）「大隅風土記逸文の必至（ヒシ）という語」『薩摩路』9 号、鹿児島。

長田須磨、須山名保子編著（1977）『奄美方言分類辞典上巻』笠間書院、東京。

長田須磨、須山名保子編著（1980）『奄美方言分類辞典下巻』笠間書院、東京。

かりまたしげひさ (2012)「琉球列島における言語接触研究のためのおぼえがき」『琉球の方言』36 号、法政大学沖縄文化研究所、pp.17～38、東京。

かりまたしげひさ（2016）「琉球諸語のアスペクト・テンス体系の形式」『琉球諸語と古代日本語―日琉祖語の再建にむけて』、くろしお出版、東京。

Shigehisa Karimata（2018）“The Linguistic Difference between Northern and Southern Ryukyuan from the Perspective of Human Movement”. *International Journal of Okinawan Studies* 9: 15-26、沖縄。

狩俣繁久（2019）「琉球語の起源はどのように語られたかー琉球語と九州方言の関係を問うー」『日本語「起源」論の歴史と展望』三省堂（近刊）、東京。

菊千代、高橋俊三編著（2004）『与論島方言辞典』櫻楓社、東京。

九州方言学会編（1991）『九州方言の基礎的研究改訂版』風間書房、東京。

国立国語研究所編（1963）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局、東京。

トマ・ペラール（2016）「日琉祖語の分岐年代」田窪・ホイットマン・平子編『琉球諸語と古代日本語―日琉祖語の再建にむけて』くろしお出版、東京。

仲宗根政善著（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店、東京。

名護市史編さん委員会編（2006）『名護市史本編・10　言語』名護市役所。

野原三義 (1979～1983)「琉球方言と九州諸方言との比較Ⅰ～Ⅴ」『沖縄国際大学文学部紀要（国文学篇）』第 8 巻第 1 号（1～16 頁）、第 9 巻 1-2 号（1～20 頁）、第 10 巻 1 号（1～16 頁）、第 11 巻 1-2 号（1～16 頁）第 12 巻 2 号（A1～A14 頁）。

服部四郎（1976）「琉球方言と本土方言」『沖縄学の黎明』沖縄文化協会。

宮良當壮（1930）『八重山語彙』東洋文庫、東京。

琉球大学沖縄文化研究所編（1968）『宮古諸島学術調査研究報告　言語・文学編』琉球大学、西原町。